## Super flumina Babylonis

a Babylonis(バビロンの流れのほとりに)

作曲: Orlande di Lassus作詞: 詩篇 第137篇 1-2節

聖路加国際病院礼拝堂聖歌隊 川津泰人 平成28年8月

バビロンに捕囚されたイスラエル人が故郷を想って歌った詩編の一節。

|       | Super   | flumina         | Babylonis,                                | illic               | sedimus         |                  |  |
|-------|---|-----------------|---|---------------------|-----------------|------------------|--|
|       | の上で、から離れて、そ<br>ばで   | 川、河、湖<br>flumen | バビロン(下記注<br>ご参照)                          | そこに、そこで             | 座ったsit          |                  |  |
|       | et  | flevimus,       | dum                                       | recordaremur,       | tui,            | Sion.            |  |
|       | そして   | 泣〈fleo          | の間、まで                                     | 思い出す。思う<br>recordor | 貴方(神)のTu<br>の属格 | シオン * 下記注<br>ご参照 |  |
| 標準的意訳 | 詩篇 第137篇 1-2<br>バビロンの流れのほ   | とりに             | ロ語訳―詩篇 第137篇 1-2節<br>われらは/バビロンの川のほとりにすわり、 |                     |                 |                  |  |
|       | 座り わたしたちは泣いた。<br>  シオンを思って、   |                 |   | シオンを思い出して涙を流した。     |                 |                  |  |
|       | 詩編ではet flevimus, cum recordaremur Sion. ここでet flevimus, <mark>dum</mark> recordaremur, <mark>tui,</mark> Sion |                 |   |                     |                 |                  |  |

## <参考情報>

情報源:フリー百科事典ウィキペディア 伊語駅Sopra i fiumi di Babilonia. là sedemmo e piangemmo, quando ripensammo a Sion

.assus 作曲: テン語形) ソンロルン (Orlando di Lasso:イタリア語 形) 生涯 生年は1532年頃とされているが厳密には不明。しかし、この時代の作曲家にしては珍しく出生地が分かっており現ベルギー、エノー州のモンスに生まれている。通称から割り出さ れた氏名はローラン・ドゥラットル(Roland Delattre)。生い立ちに関する資料に乏しいが、確証のない逸話がいくつも伝えられており、中でも最も有名なものは、あまりの比類ない 美声に3度も誘拐されてイタリアに辿り着いたというものである。12歳の時にフェランテ・ゴンザーガに連れられ、北海湾岸のネーデルラントを旅立ち、マントヴァとシチリア、そして (1547年から1549年まで)ミラノに足を運ぶ、ミラノ在留中にマドリガーレ作曲家のオステ・ダ・レット(Holste da Regio) の面識を得て、初期の作曲様式に影響を受ける。 1550年代初頭からナポリでコンスタンティーノ・カストリオートにより声楽言業作曲家として雇われる。ラッソの最初期の作品はこの時期までさかのほると推定されている。それから ローマへ移り、同地のフィレンツェ公家に仕官した。1553年には、ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂楽長に就任する。わずか21歳の人間にとっては華々しい名誉職であったにもかかわらず、ラッソはわずか1年間だけで離職してしまう(後任はパレストリーナ、1555年着任)。

1554年になると所在についての確たる証拠がなくなるものの、当時の主張によると、フランスとイングランドを訪問していたという。1555年にネーデルラントに帰国し、初期作品をアントウェルベンにて出版した(1555年 ~ 1556年)。1556年にバイエルン公アルブレヒト5世の宮廷音楽家に採用される。ラッソはミュンヘンに勤めるネーデルラント出身者のひとりであったが、しかし格段に有名なネーデルラント人であった。1563年には楽長に昇格。どうやらミュンヘン時代は幸福だったようで、この地に定住することを決め、1568年に所帯をもち、後に作曲家になる息子ふたりをもうけた。ラッソは終生にわたって、イイエルン宮廷に奉公し、アルブレヒト5世とその後継者ヴィルヘルム5世に仕えた。ラッソが1560年代までにかなり有名になると、ミュンヘンに留学してラッソの門を叩くものも現れるようになった。アンドレーア・ガブリエーリは1562年から、おそらく1年間ラッソに師事した。アンドレーアの甥ジョヴァンニも1570年代に学んでいるかもしれない。

ラッソの名声は限られた音楽界の外にも広まるようになり、1570年には神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン2世から貴族に叙列されたが、作曲家には異例の待遇であった。1571年 フッソの名声は限られた音楽系の分にも広まるようになり、1570年には神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン2世から貢族に叙例されたか、作曲家には異例の待遇であった。1571年 には教皇グレゴリオ13世より教皇庁騎士に叙任され、黄金拍車勲章を授与される(作曲家に対する待遇は、それから200年後にモーツァルトに対して行われただけである)。1571年と1573年には、シャルル9世の招待でフランスに訪問した。 こうした君主や責族の中には、より魅力的な地位を申し出てラッソを口説き落とそうとする者もあったが、どうもラッソは報酬よりも、自分の地位の確かさと、パイエルン宮廷の申し 分のない演奏活動に対する関心が優先したようだ。1580年には、ザクセン公よりドレスデン宮廷への就職を打診された際、ラッソは次のように書き送っている。「私は自宅からも自宅の庭からも、そのほかのミュンヘンのよいところからも離れたくはないのです。

(しかしながら別の見方も可能かもしれない。ラッパはルネサンスの作曲家の中では、橋金に恵まれて家庭となった数少ないひとりであり、結婚するまでに幾多の宮廷を渡り歩く ことで、当時の宮廷社会の裏側や暗部を知っていた可能性がある。おそらく、当時の複雑なヨーロッパの社会情勢や宗教界の分裂を考え、家庭を守る意味から、より高い名声や 報酬を棒に振ったのではなかったか。また、当時のヨーロッパ君主や諸侯のかけ引きに乗じることで、主君から慰留のために報酬が上乗せされたのかもしれない)。

Super flumina Babylonisバビ ロンの河のほと りに

ルニ。 モテット作曲家としてのラッソは、ルネサンス音楽全体で最も変幻自在で秀逸である。その作品は、崇高なものから滑稽なものまで幅広く、しばしば宗教音楽には結びつかないような一抹のユーモア感覚も忍ばせている。例えば、《パビロンの河のほとりに Super flumina Babylonis 》は、批い歌手の諷刺であり、口ごもったり、やめたり歌いだしたりして、大体のところ混乱に陥っている。モーツァルト的な作曲態度でというわけではないが、発想としては《音楽の冗談》に近いものがある。ラッソのモテットの多くは、儀式的な機会の

もともとは解散という意味一Ite,missa estここで会は終わるので解散

キリストと弟子たちの最後の晩餐を象徴的に再現するキリスト教会の最も重要な典礼、その基本は、キリストの体と血になぞらえパンとぶどう酒を ミサとは 接ば、地に感謝し、がいるような表現を存在しています。 捕囚の地で、敵兵の慰みに、シオンの詩を請われた屈辱を思い出し、シオンへの忠誠と、敵国への復讐を誓うもの。散文に近い詩である。 日本 ヘブライ語原典ではBabel、七十人訳でBabylon又はBabyloniaと訳された。 バビロニアの首都をさす

詩管 第137管

-フラテス河を指す Babylon

エルサレムに隣接する丘、後にエルサレムの呼称となる、また、象徴的に イスラエル、天国、神のいますところを指す場合もある Sionism:ユダ Sion(Zion)

ヤ人のパレスチナ復帰運動 前998年ダビデ王による占領以後・イスラエル王国の首都となり前、926年ユダヤ王国の首都となったが、前587年新バビロニア帝国によりヤハウェ神 前300年とようによる自由原の後、インブルと当のと自由により前320年エイトを当び自由にようにから前307年の管理の下前515年に神殿が再建された。 最始め全市が破壊、人民の一部は補囚民としてバビロンの地は連れ去られた。補囚民の帰還後ペルシャ王の管理の下前515年に神殿が再建された。エルサレムは詩篇では神の住みかとされている。 Babylonis

Jerusalem erusalemエルサレ

モアブ(死海の東部現ヨルダン南西部)の南境に接する古い王国、ユダ王国にしばしば戦いを仕掛け、バビロニア軍のイスラエル攻略に加担した

Edom(エドム)

穀物、ぶどう酒と並んで神の祝福の徴(しるし)と考えられ、これを欠くことは不忠実に対する神罰、これが豊かに恵まれることは救いを意味する。 聖なる油の注油は信仰者に聖霊の多種多様な恵みを伝える. キリスト(ギ語christos油を注がれたもの)

油 oleum

聖書では、神の祝福、聖別の象徴であり、祭司、王、預言者の努めを授ける際に油が注がれた

ある人や、物、場所や時を神に捧げること、又は捧げる者/物を、 他の者/物と区別すること..最も重要な聖別はキリストの定めた言葉(聖別句)を 

聖別 consecrat

他に、ノア契約,アブラハム契約、ダビデ契約,などがある 旧約

七十人訳聖書(しちじゅうにんやくせいしょ羅:Septuaginta、「70」の意。LXXと略す)は、ヘブライ語のユダヤ教聖典(旧約聖書)の古典ギリシア語 訳、紀元前3世紀中葉から前1世紀間に、徐々に翻訳・改訂された集成の総称を言う。ギリシヤ語読みであるセプトゥアギンタとも呼ばれる。

本来は経済活動に伴う法的義務、零落して自分の土地を売ったり、自分自身を身売りしなければならない時に、その親族がそれを買い戻すこと、 edemptio/redemp 一般的には、罪を不問に付すこと、救うという意味になった

ロン・ナルランド・ディ・ラッソ(Orlando di Lasso:イタリア語形)、オルランドゥス・ラッスス(Orlandus Lassus:ラテン語形)(1532年 - 1594年6月14日 ミュンヘン は、後期ルネサンスのフランドル楽派の作曲家。 名前の表記としては、近年では、Orlande de Lassus や Roland de Lassus なども使われるようになっ

<u>)ーナと並んで、こんにちでは、フランドル楽派のよく練れたポリフォニー様式を最も代表する作曲</u> *Psalmus David, Jeremiae*. Super flumina Babylonis illic sedimus et flevimus, cum recordaremur ニルルイジ・ダ・パレストリー Psalm 137 (詩編137章1-2節、新共同訳)